椋本南方遺跡（３次）・松山遺跡（２次）
発掘調査報告

２０１２（平成２４）年１２月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1．本書は、三重県津市芸濃町に所在する椋本南方遺跡第３次・松山遺跡第２次の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の調査は、高度水利機能確保基盤整備事業に伴い、三重県教育委員会が三重県農水商工部から依頼を受けて実施した。

3．発掘調査の経費は、その一部を国庫補助金を得て三重県教育委員会が負担し、他は三重県農水商工部から経費の執行委任を受けた。

4．調査の体制等は次の通りである。
　調査主体　三重県教育委員会
　調査担当　三重県埋蔵文化財センター
　　調査研究Ⅰ課　課長　森川常厚
　　主査　谷口文隆
　土工受託機関　有限会社西武緑化
　調査期間　平成 23 年 9 月 14 日～平成 24 年 1 月 12 日
　調査面積　椋本南方遺跡　769㎡
　　松山遺跡　98㎡

5．調査にあたっては、地元自治会をはじめ、三重県農水商工部、津農林水産商工環境事務所、津市教育委員会の協力を得た。

6．当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査研究Ⅰ課が行い、本書の執筆・編集は谷口文隆が行った。

7．当地は平面直角座標系第Ⅵ系に属しており、本書での方位は座標北を使用している。
　なお、座標値は世界測地系 2000 に基づいて表示している。

8．当発掘調査の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

9．土層及び遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行の『新版標準土色帖（21 版）』による。

10．本書では、以下のように遺構の略記号表記をしている。
　ＳＤ：溝　ＳＫ：土坑

11．遺構検出時に出土した遺物は、便宜上包含層からの出土とした。

12．松山遺跡について、三重県埋蔵文化財センターが行った昭和 62 年の発掘調査を第１次とし、今回の調査を第２次としたが、平成 17 年にも芸濃町教育委員会により発掘調査が行われている。

目　　次

Ⅰ　前　　言 …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　文化財保護法等に関する諸手続 …… 1
　3　調査経過…… 1

Ⅱ　位置と環境…… 2
　1　地理的環境 …… 2
　2　歴史的環境 …… 2

Ⅲ　遺構…… 5
　1　椋本南方遺跡Ａ区……5
　2　椋本南方遺跡Ｂ区……5
　3　椋本南方遺跡Ｃ区……5
　4　松山遺跡Ｄ区…… 17

Ⅳ　遺物…… １７
　1　椋本南方遺跡Ａ区…… 17
　2　椋本南方遺跡Ｂ区…… 17
　3　椋本南方遺跡Ｃ区…… 17
　4　松山遺跡Ｄ区…… 18

Ⅴ　結　　語…… ２０

挿　図　目　次

第 1 図　遺跡位置図 …… 3
第 2 図　遺跡地形図 …… 4
第 3 図　調査区位置図 …… 4
第 4 図　椋本南方遺跡Ａ区遺構平面図 …… 6
第 5 図　椋本南方遺跡Ａ区土層断面図 …… 7
第 6 図　椋本南方遺跡Ｂ区遺構平面図 …… 8
第 7 図　椋本南方遺跡Ｂ区遺構平面図 …… 9
第 8 図　椋本南方遺跡Ｂ区土層断面図 …… 10
第 9 図　椋本南方遺跡Ｂ区土層断面図 …… 11
第 10 図　椋本南方遺跡Ｂ区土層断面図 …… 12
第 11 図　椋本南方遺跡Ｃ区遺構平面図 …… 13
第 12 図　椋本南方遺跡Ｃ区土層断面図 …… 14
第 13 図　松山遺跡Ｄ区遺構平面図 …… 15
第 14 図　松山遺跡Ｄ区土層断面図 …… 16

第 15 図　出土遺物実測図 …… 18

表　目　次

第 1 表　出土遺物観察表 …… 19

写　真　目　次

写真図版 1　椋本南方遺跡Ａ区調査前風景、椋本南方遺跡Ａ区全景 …… 21
写真図版 2　椋本南方遺跡Ｂ区調査前風景、椋本南方遺跡Ｂ区全景 …… 22
写真図版 3　椋本南方遺跡Ｃ区調査前風景、椋本南方遺跡Ｃ区全景 …… 23
写真図版 4　松山遺跡Ｄ区調査前風景、松山遺跡Ｄ区全景 …… 24
写真図版 5　椋本南方遺跡Ａ区小穴群、椋本南方遺跡Ｂ区小穴群 …… 25
写真図版 6　松山遺跡Ｄ区小穴群、出土遺物 …… 26

Ⅰ　前　　言

１　調査に至る経過

三重県農水商工部農業経営室による地域活性化プランの施策である高度水利機能確保基盤整備事業が津市芸濃町北神山地区においても推進されることになった。この事業の照会を受けた三重県埋蔵文化財センターでは、事業地には存在が既に知られている椋本南方遺跡と松山遺跡が含まれているため、昭和62年度県営圃場整備事業に伴い県教育委員会が行った文化財範囲確認調査の結果をもとに、両遺跡の保存について県農水商工部と協議を開始した。その結果、工事掘削深度が遺構に影響を及ぼす範囲があることが判明したため、椋本南方遺跡で769㎡、松山遺跡で98㎡について発掘調査を実施し記録保存することになった。また、工事掘削深度が遺構に及ぼす影響が軽微な600㎡については、工事立会を実施した。

なお、この調査は平成23年４月１日付で公共事業総合推進本部事務局長より依頼され、実施したものである。

２　文化財保護法等に関する諸手続

文化財保護法（昭和25年法律第214号）および三重県文化財保護条例（昭和32年条例第72号）にかかる諸手続は以下のとおりである。

○ 三重県埋蔵文化財保護条例第48条第１項

・平成22年９月１日付　津農環第1390号

三重県知事から三重県教育委員会教育長あて

「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」（里ノ内、椋本南方、松山遺跡）

○ 三重県埋蔵文化財保護条例第48条第２項

・平成22年９月15日付　教委第12－4073号

三重県教育委員会教育長から三重県知事あて

「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」（里ノ内、椋本南方、松山遺跡）

○　文化財保護法第99条第１項

・平成23年９月14日付　教埋第177号

三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて

「埋蔵文化財発掘調査の報告について」

○ 文化財保護法第100条第２項

・平成24年１月19日付　教委第12－4418号

三重県教育委員会教育長から津警察署長あて

「埋蔵文化財の発見について（通知）」

３　調査経過

調査の開始に先立って、９月16日に県農水商工部と現地協議を行い、調査範囲、排土置き場、調査基地の設置場所、工程等の再確認及び調整を行った。

調査区が４カ所に分かれるため、椋本南方遺跡を西からＡ区、Ｂ区、Ｃ区とし、松山遺跡をＤ区とした。

調査は工事計画と調査計画の調和を図るため、工事立会から行った。600㎡を対象に10か所で工事掘削深まで掘り下げ、遺構に与える影響はないことを確認し、工事立会は終了した。

発掘調査について、まずＡ区から実施を開始した。10月17日に重機による表土除去を行い、10月24日ー27日の期間で人力による包含層及び遺構掘削を行った。28日には写真撮影後実測に入り、11月２日にＡ区の調査を終了した。

続いて４日より、排土の関係上、Ｃ区の調査に入った。４日に重機による表土除去を行い、８日と９日の両日で人力による包含層及び遺構掘削を実施した。10日には写真撮影及び実測を行い、Ｃ区の調査を終了した。

引き続きＤ区の調査に入った。14日と15日の両日で重機掘削を行い、17日に人力による包含層及び遺構掘削を実施した。18日には写真撮影後実測に入り、21日には実測を終え、Ｄ区の調査を終了した。

最後に、Ｂ区の調査に入った。25日ー12月６日の期間で排土置き場への入り口を残して重機掘削を行い、９日ー13日の期間で人力による包含層及び遺構掘削を実施した。13日には排土置き場入り口の掘削を重機及び人力で行い、全ての掘削を終了した。14日に写真撮影をした後、19日にかけて実測を行った。20日にＢ区を県農水商工部に引き渡した。

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

椋本南方遺跡（1）は津市芸濃町椋本ほかに、松山遺跡（2）は津市芸濃町萩野ほかに所在し、両遺跡は隣接している。津市芸濃町は三重県の中央部に位置して、伊勢平野の西端にあたる。鈴鹿山脈の南端は布引山脈につながり、両遺跡の南西には、南部鈴鹿山脈[①]の最高峰、経ヶ峰が、北西には急峻な錫杖岳がそびえ、それをつなぐように500ー600ｍの山々がつながっている。河川は一般に背後の山が浅く、流域もせまい。中勢北部で最大の安濃川は、鈴鹿山脈錫杖岳付近に端を発し、標高820ｍの経ヶ峰の山峡を縫うように流れ、芸濃町忍田付近で平野部へ抜け出ている。さらに左岸の見当山丘陵、右岸の半田丘陵というなだらかな丘陵の間に沖積平野を形成しつつ流れ、30㎞の流路で伊勢湾に注いでいる。椋本南方遺跡、松山遺跡は、その安濃川を忍田地区より２㎞ほど下った平野部の左岸段丘上、椋本集落の南方に広がる安濃川に向かう緩やかな斜面に立地し、現況は水田、海抜は50ｍー55ｍである。

2　歴史的環境

縄文時代に関して、安濃川沿いでは、上新田遺跡（3）、雲林院青木遺跡（4）、北奥遺跡（5）、大石遺跡（6）、赤坂遺跡（7）、椀田遺跡（10）、多門遺跡（11）、椋本南方遺跡で、石鏃、あるいは縄文土器等が出土し[②]、川沿いに広く生活圏が広がっていたことが考えられる。大石遺跡では、中期末の石組炉をもつ竪穴住居と北陸系を含む縄文土器が発掘された[③]。雲林院青木遺跡では、中津式の双耳壺を埋置した土坑などが検出されており、後期初頭に属する中津式の安定した資料が出土している[④]。また北奥遺跡では、流域最古級の土器となる早期の高山寺式押型文土器が出土している[⑤]。

弥生時代に関しては、安濃川下流に前期から終末期まで長期にわたって大規模な集落を形成していたと考えられる納所遺跡があり、安濃川流域ではこの納所遺跡を拠点として、中期から後期にかけて小規模な遺跡が広がりを見せたと推定されている[⑥]。興遺跡（8）、栢井戸遺跡（9）、馬屋町遺跡（12）、椀田遺跡、多門遺跡などがあり、河川沿いの沖積地から河岸段丘上にかけて広く分布している。椀田遺跡から中期の土器が出土しており、この時期に弥生人によるこの地区への開発が着手されたものと考えられる[⑦]。

古墳時代に関して、安濃川中流域では、中沢古墳群（13）、竹之内古墳（14）、鳩の上古墳群（15）、松山古墳（16）、大屋垣内古墳群（17）、宮谷古墳群（18）、東山古墳群（19）、諸谷古墳群（20）があるが、それらはいずれも下流に存在する古墳群に比べ群集規模は小さいといえる。また古墳自体の規模も横穴式の円墳が主で、後期のものと考えられる。竹之内古墳から出土する須恵器や土師器が、６世紀後半から７世紀初めであることからも、このことが実証されている[⑧]。

古代に関して、ここ安濃川流域においても条里制が行われた。『四天王寺文書』に「忍田里」があらわれ、現在も大字としてその里名が用いられている[⑨]。また、鈴鹿関と伊勢神宮を結ぶ古道は、椋本南方・松山両遺跡近くで安濃川を越え、芸濃町椋本の位置する段丘に上って鈴鹿関を指向したと考えられ、鈴鹿・市村の両駅の中間にあたる当遺跡周辺にも駅家が推定されていた[⑩]。また当地では、弥生時代の遺跡とされている馬屋町遺跡があるが、「馬屋町」という小字とその位置から、この地に駅家を推定することが可能となりえる[⑪]であろう。これらから、当遺跡は古代の交通の要所であったものと思われる。

中世に関して、大石遺跡では、区画施設を伴う複数の掘立柱建物が確認されたほか、「僧器」「侍器」「国枝」「包松」などの特徴ある墨書土器も出土しており、侍層などの地域有力者層の居館かと想定されている[⑫]。また、室町時代から戦国時代にかけての居館である野呂氏館跡（21）では、類例の少ない蒸風呂遺構が確認されている[⑬]。一方、雲林院の西方丘陵には雲林院城（22）がある[⑭]。室町時代に安濃郡を支配した長野工藤氏の一族、雲林院氏の軍事拠点とされるところであり、その東の台地一帯は雲林院氏の居館跡と伝えられている。そして包長、包是、政盛という雲林院の代表的な刀工の存在[⑮]も想定されており、中世に

おいても歴史的に注目を集める地域であるということが言える。

近世に関して、芸濃町内の主要交通路は伊勢別街道となる⑯。東海道関の東の追分から楠原、椋本を通り、江戸橋で伊勢街道に合流する椋本を南北に縦貫する参宮道であるが、中世より楠原宿を中心に繁栄したとされる。その繁栄も江戸時代に入ると椋本宿に移ったとされ、椋本の街道沿いには旅籠をはじめ、古い街並みが今も残されている。

[註]

① 芸濃町教育委員会『芸濃町史上巻』1986 年

② 芸濃町教育委員会『雲林院青木遺跡発掘調査報告』2005 年

・芸濃町教育委員会『北奥遺跡発掘調査報告』2003 年

・三重県埋蔵文化財センター『安濃川流域の考古資料』2006 年

・三重県埋蔵文化財センター『赤坂遺跡発掘調査報告書』1991 年

・三重県埋蔵文化財センター『東浦遺跡・椋本南方遺跡ほか』1993 年

・芸濃町教育委員会『三重県安芸郡芸濃町遺跡分布地図』2002 年

・津市教育委員会『三重県津市遺跡位置図』2011 年

③ 三重県埋蔵文化財センター『平成 3 年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告−第 1 分冊−』1992 年

④ 芸濃町教育委員会『雲林院青木遺跡発掘調査報告』2005 年

⑤ 芸濃町教育委員会『北奥遺跡発掘調査報告』2003 年

⑥ 前掲①に同じ

・三重県教育委員会『納所遺跡−遺構と遺物−』1980 年

・三重県埋蔵文化財センター『納所遺跡Ⅰ−遺構・土器・木製品編−』2012 年

⑦ 前掲①に同じ

⑧ 前掲①に同じ

⑨ 前掲①に同じ

⑩ 上田正昭『探訪　古代の道　第二巻』法蔵館　1998 年

⑪ 前掲⑩に同じ

⑫ 前掲③に同じ

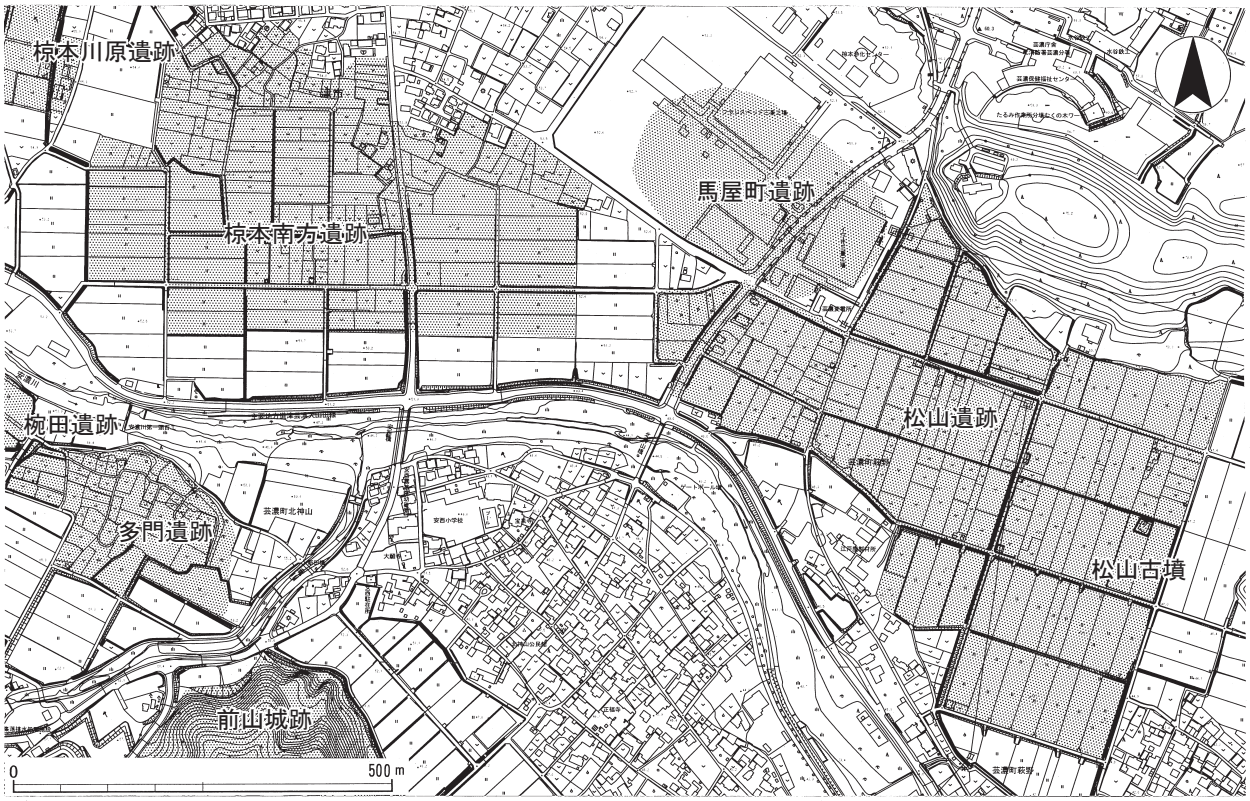
⑬ 芸濃町教育委員会『野呂氏館跡発掘調査報告書』1984 年

⑭ 三重県教育委員会『三重の中世城館』1976 年

⑮ 前掲①に同じ

⑯ 前掲①に同じ

第１図　遺跡位置図（1:50,000）〔国土地理院「椋本」1:25,000 より作成〕



第２図　遺跡地形図（1:10,000）

第３図　調査区位置図（1:5,000）

Ⅲ　遺　　構

１　椋本南方遺跡Ａ区

Ａ区は、椋本南方遺跡西方の南北に走る農道に沿って埋設されるパイプラインの埋設箇所に設置している。そのため調査区は農道の西端及び水田の畦上にある。基本層序については後世の撹乱が激しく確認できないが、道路上から、アスファルト、砕石、巨石を含む客土となり、検出面に至る。検出面は、北部では道路下140㎝で黄褐砂礫の、中南部では黒土、あるいは黄橙砂質土にあたるなど安定していない。調査区内では撹乱が深いため、確認できた検出面自体も相当削平されていることが予想される。

調査の結果、溝１条と小穴が複数検出されたが、狭小な調査区のため、遺構の全体を把握するのは難しい。SD １は土坑状で、埋土から中世前半の土師器鍋と土師器皿の小片が出土している。小穴については、山茶椀、中世以前の土師器が出土したものが４基あるが、その性格は定かではない。

遺構からの出土は少ないものの、遺構検出時には、緑釉陶器、須恵器、灰釉陶器、青磁、白磁、山茶椀、土師器等、古代及び中世前期の遺物が小片であるが出土している。

ＳＫ２　調査区南部で検出した、検出面からの深さ40㎝の土坑とした。撹乱の影響のため、南へどの程度広がるかは分からないが、埋土から平安時代の土師器片が検出された。埋土は、土坑南部でにぶい赤褐土、またそれを切るように土坑北部で黒砂質土があるため、複数の土坑が重複している可能性がある。土坑上には、にぶい黄褐土層があり、その層の中に集石がみられる。集石は半円状を呈しているが、大きさや長径の向きなど統一性がないため、組まれたものではないと考えられる。その直下に、厚さ約７㎝の淡黄砂と約４㎝の暗青灰粘土の層がある。暗青灰粘土には鉄分の沈殿があり、非常に堅い層となっている。両層ともに北に向かって徐々に薄くなり、集石の北端付近で消滅している。集石は土坑を伴うものではなく、また直下のSK ２にも関連しないものと考えられ、調査区が狭小なこともあり、その形態や規模、性格は不明である。

２　椋本南方遺跡Ｂ区

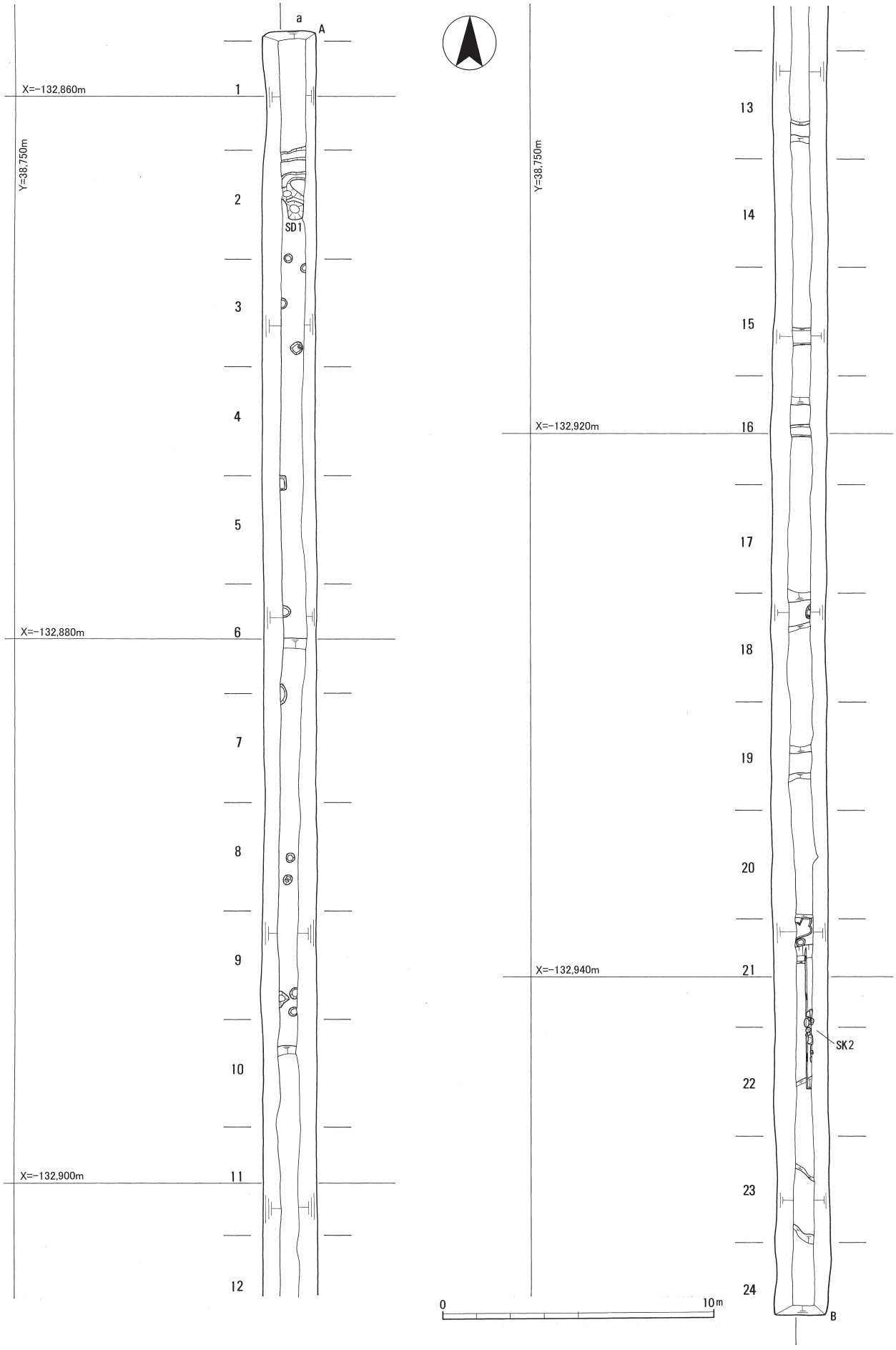
Ｂ区もＡ区と同じく、農道の北端及び水田の畦上に設置している。後世の撹乱を激しく受けており、確認できた検出面は削平されていることが予想され、基本層序は確認できない。道路の上から、160㎝の深さで黄褐色土または明赤褐粘土の検出面となる。また調査区中央部には、砂礫あるいは砂質土を含む流路が幅およそ90ｍにわたって見られる。

調査の結果、溝３条と土坑２基、そして複数の小穴が検出された。SK ２は流路上の検出であり、奈良・飛鳥時代の土師器甕の小片が出土しているものの、遺構かどうかは疑わしい。SD １からは、古代の甕、山茶椀、近世以降の陶器が出土しており、埋土の状況と現在の舗装道路の進行方向に沿っていることから、近世以降の撹乱溝であると考えられる。SD ３からは平安時代のロクロ土師器や台付皿が、SK ５からは古代の土師器皿が出土しているが、小片・少量であり、土坑の性格や時期決定には至らない。小穴群からは古代の土師器片が出土しているが、検出面の幅がおよそ80㎝と狭く、柱跡と考えてもどのような規模の建物であったかまでは確認できない。その他、表土からも山茶椀が数点出土している。

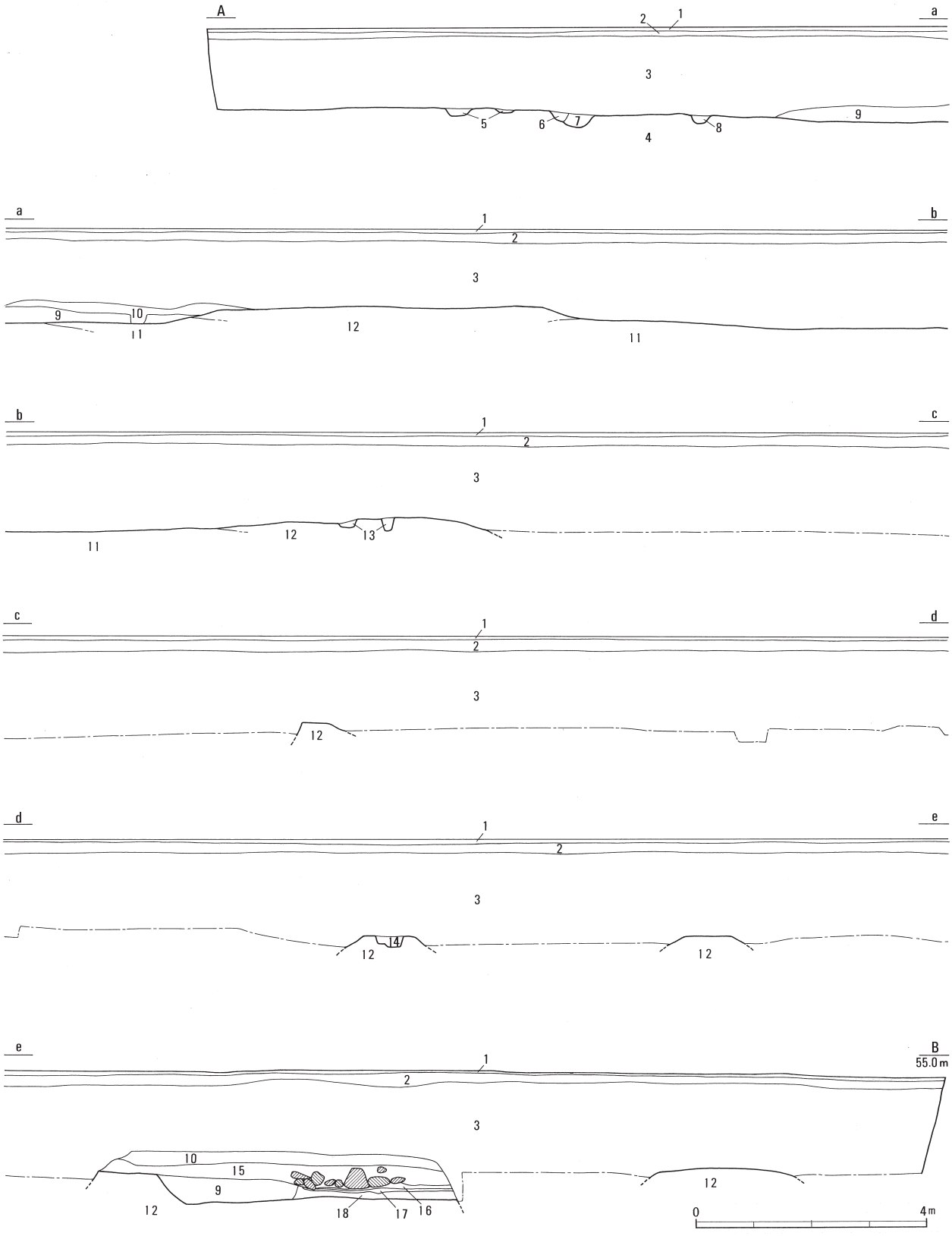
ＳＤ４　調査区中央やや東で検出し、当初東西に延びる幅２ｍの溝と考えられた。掘削の結果、複数の小穴が数個の石を伴って見られた。埋土は暗灰土であり、その埋土からは小穴の前後関係は分からない。石の大きさは、大小さまざまで、配置も並べられたようには思えない。室町時代の土師器皿口縁部が出土したが、この遺構の性格は不明である。

３　椋本南方遺跡Ｃ区

Ｃ区もパイプラインの埋設箇所に設置しており、農道の西端及び水田畦上にある。やはり後世の撹乱の影響で、確認できた検出面も削平されていることが予想される。明確な遺構も検出されず、遺構から出土した遺物はない。遺構検出時には奈良時代の土師器片、ロクロ土師器、山茶椀、室町時代の土師器羽釜など出土したが、いずれも小片で少量である。

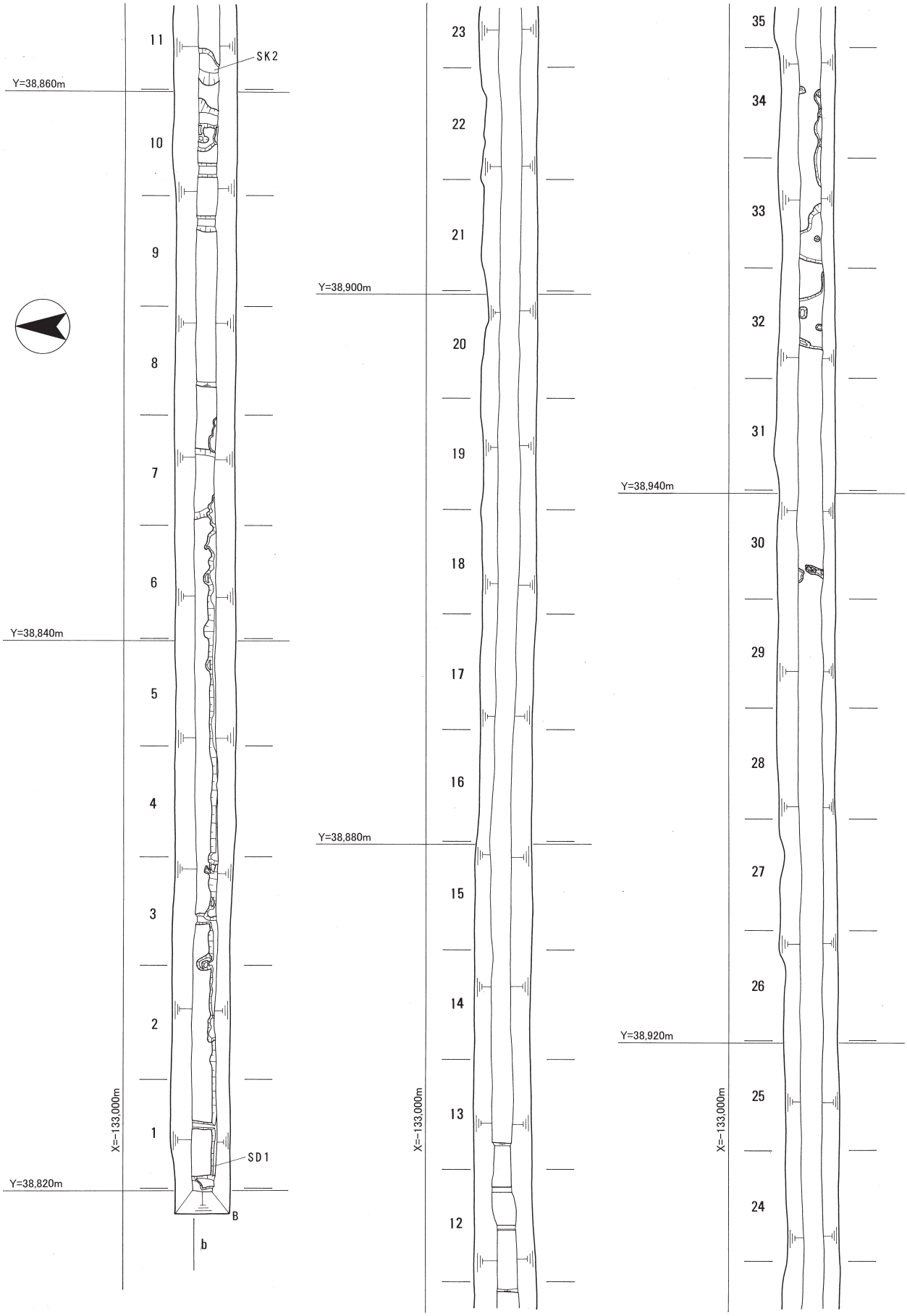


第４図　椋本南方遺跡Ａ区遺構平面図（1:200）

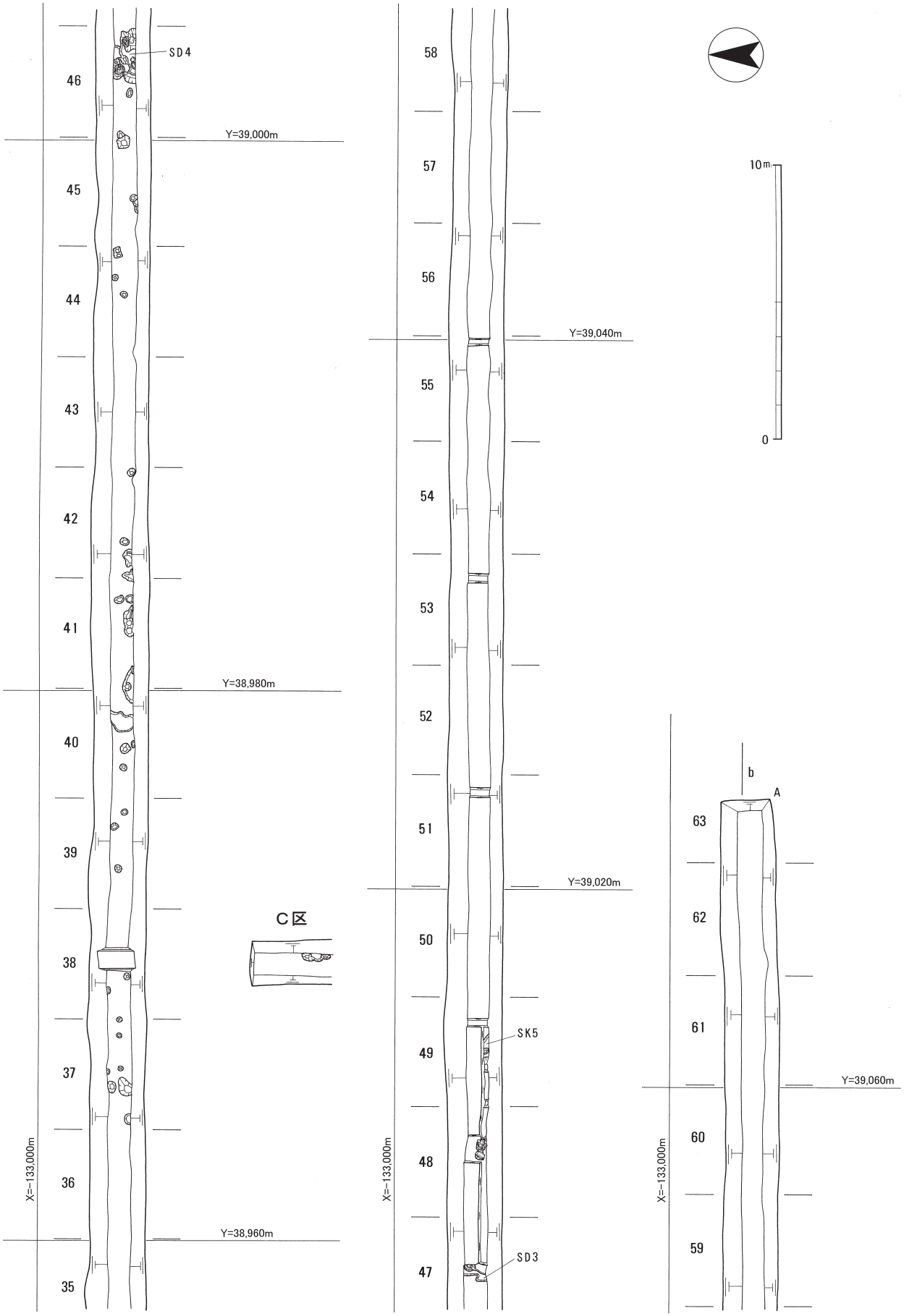


1　青灰アスファルト＜１０BG ６／１＞
2　青灰砕石＜１０BG ５／１＞
3　にぶい黄橙混岩石土＜１０YR ６／４＞（客土）
4　黄褐砂礫＜１０YR ５／６＞（検出面）
5　黒土＜N １．５＞
6　黒砂質土＜１０YR １．７／１＞
7　黒土＜７．５Y ２／１＞（SD1 埋土）
8　黒褐土＜１０YR ２／２＞
9　黒砂質土＜７．５Y ２／１＞
10　黄褐土＜１０YR ５／６＞
11　黒土＜１０Y ２／１＞（検出面）
12　黄橙砂質土＜１０YR ７／８＞（検出面）
13　暗褐土＜１０YR ３／３＞
14　暗褐土＜１０YR ３／４＞
15　にぶい黄褐土＜１０YR ４／３＞
16　淡黄砂＜５Y ８／３＞
17　暗青灰粘土＜５B ３／１＞（鉄分沈殿・非常に堅い）
18　にぶい赤褐土＜５YR ４／３＞

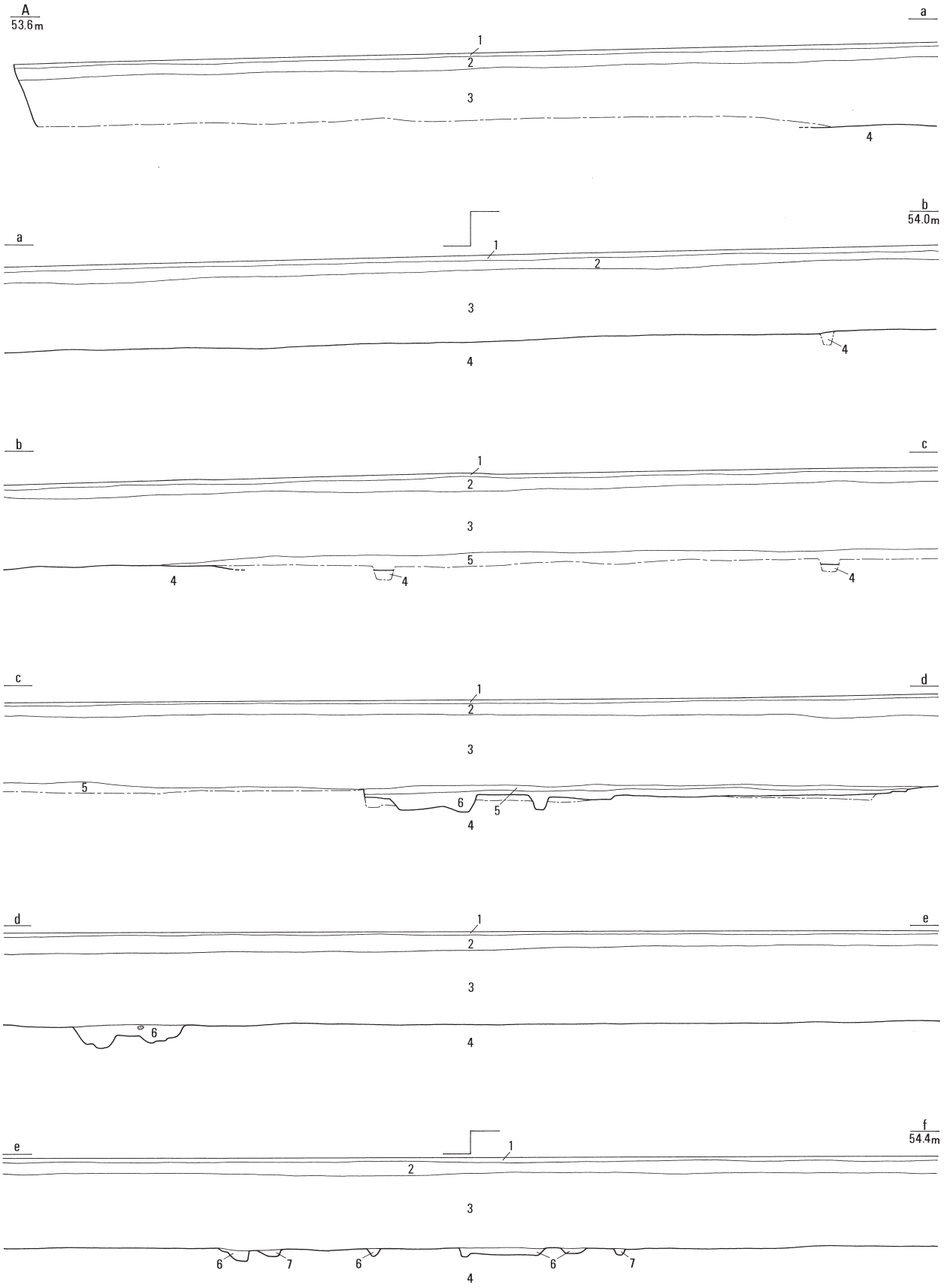
第５図　椋本南方遺跡Ａ区土層断面図（1:100）



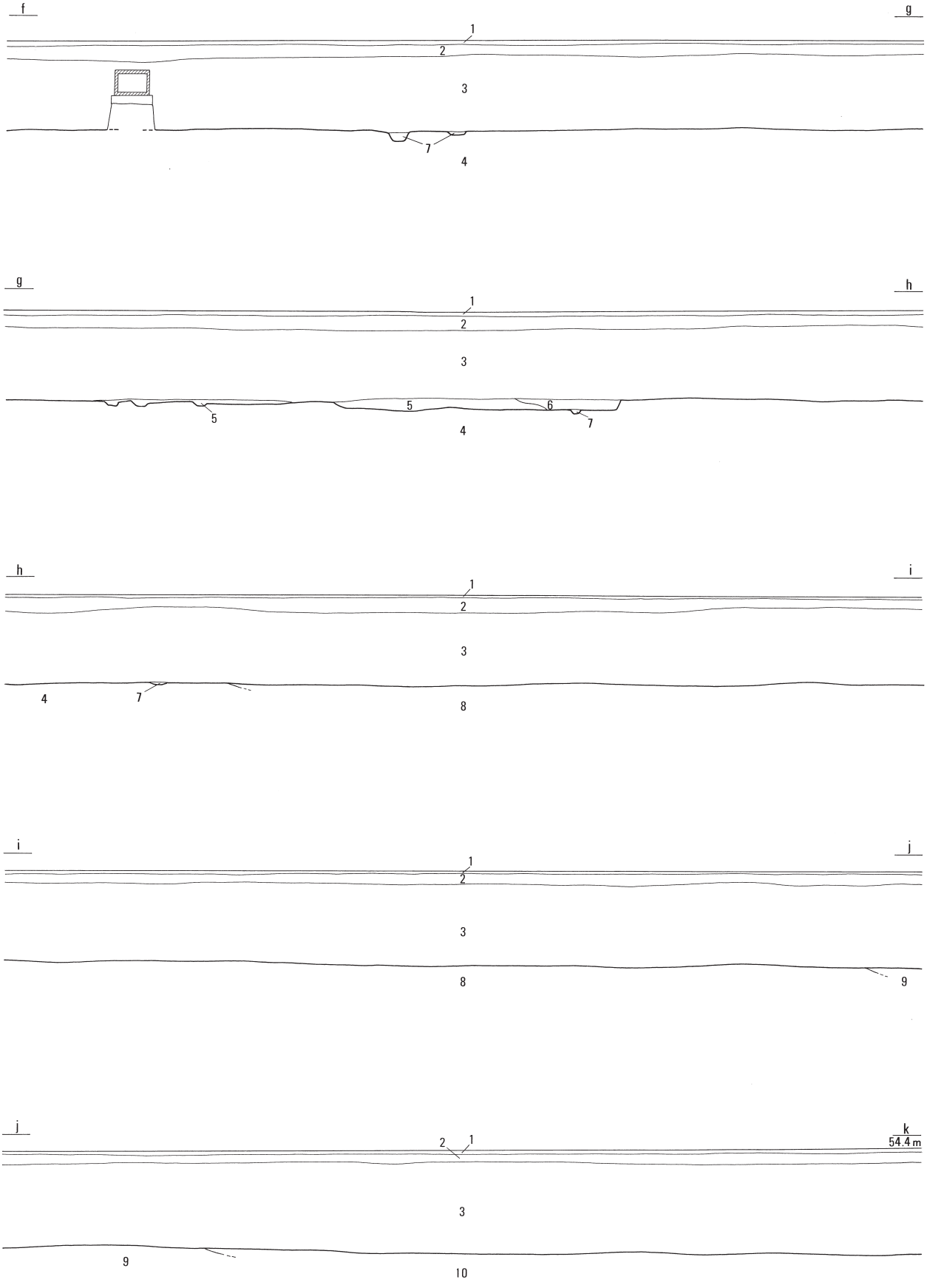
第６図　椋本南方遺跡Ｂ区遺構平面図①（1:200）



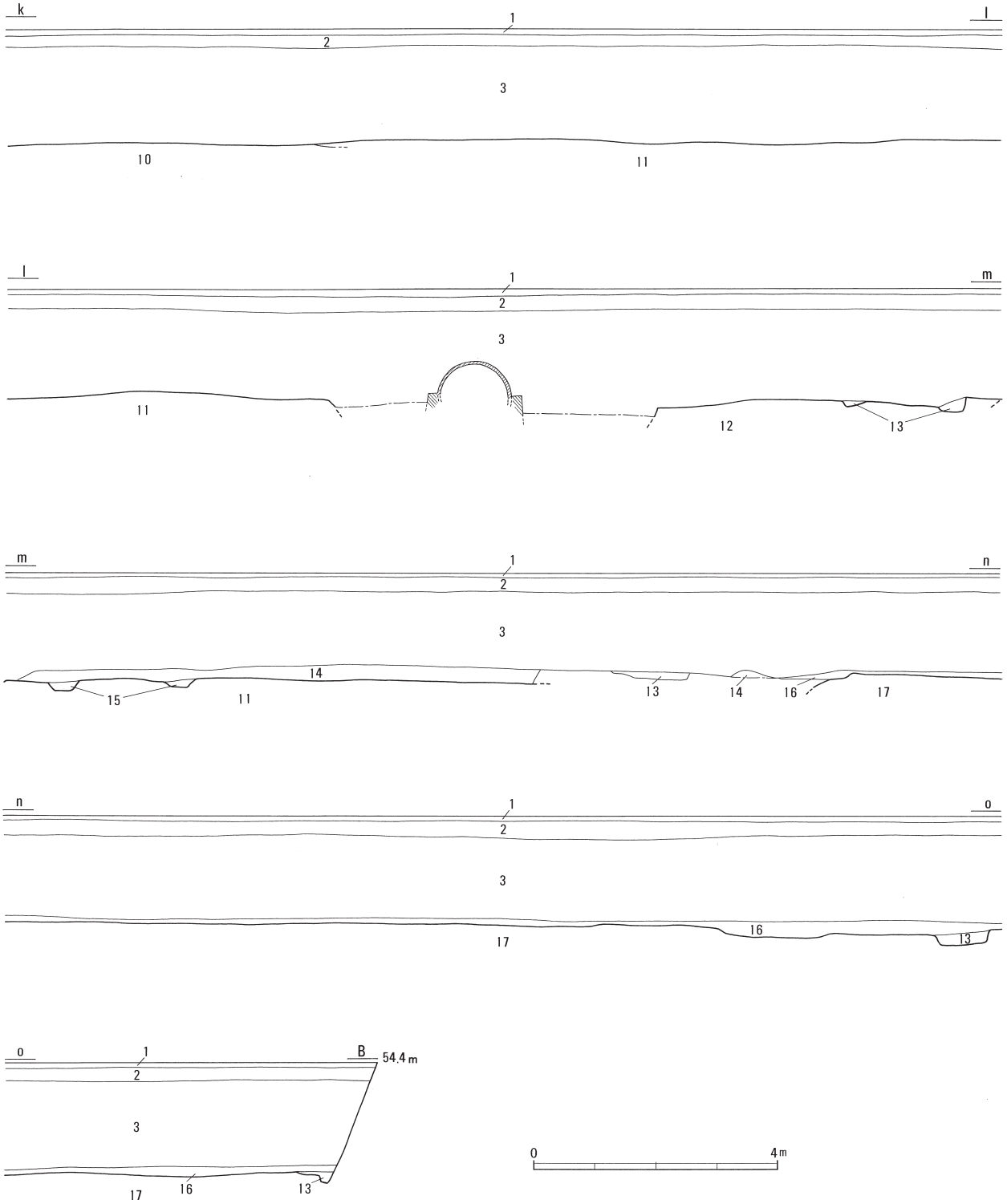
第７図　椋本南方遺跡Ｂ区遺構平面図②（1:200）



第８図　椋本南方遺跡Ｂ区土層断面図①（1:100）

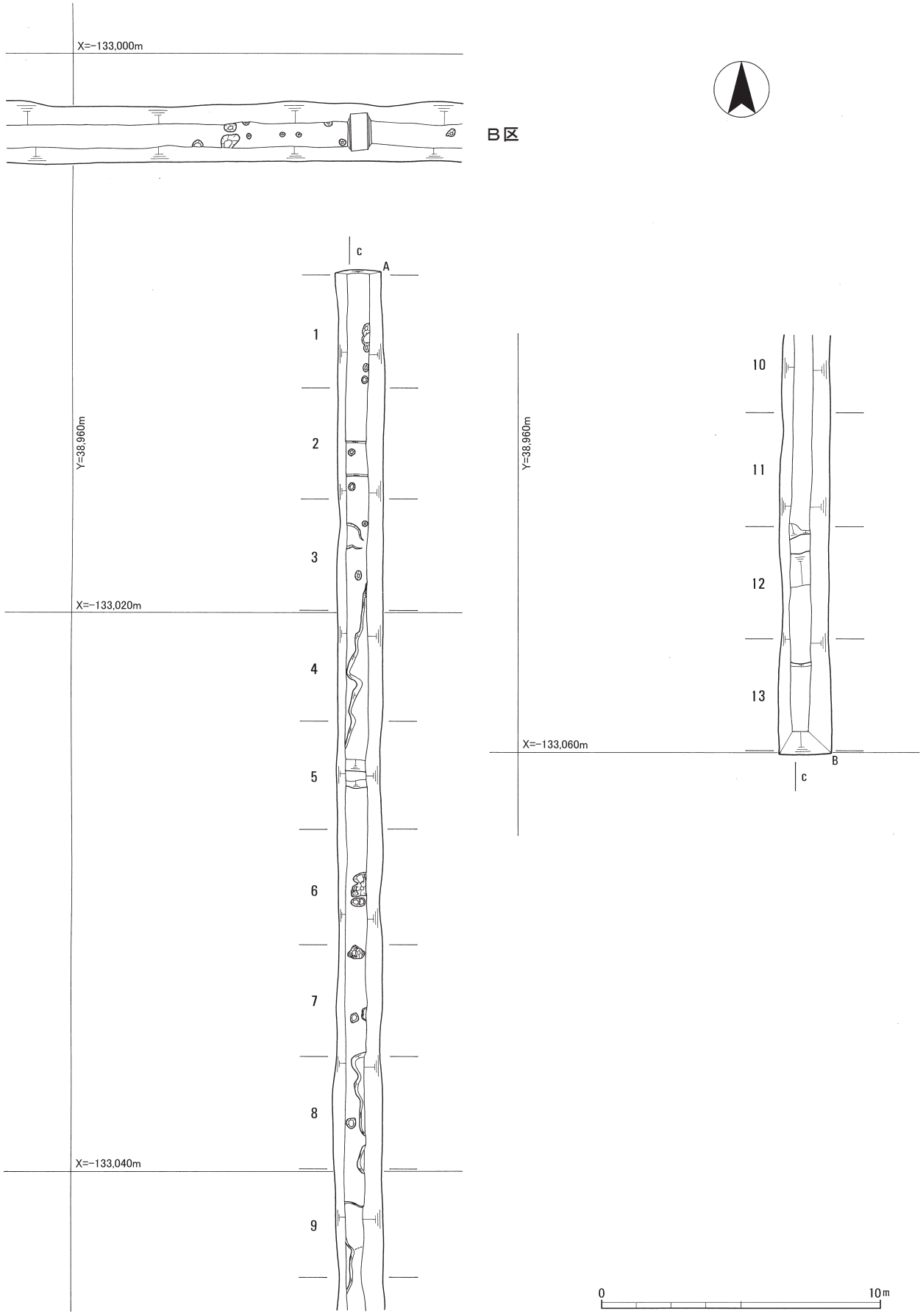


第９図　椋本南方遺跡Ｂ区土層断面図②（1:100）

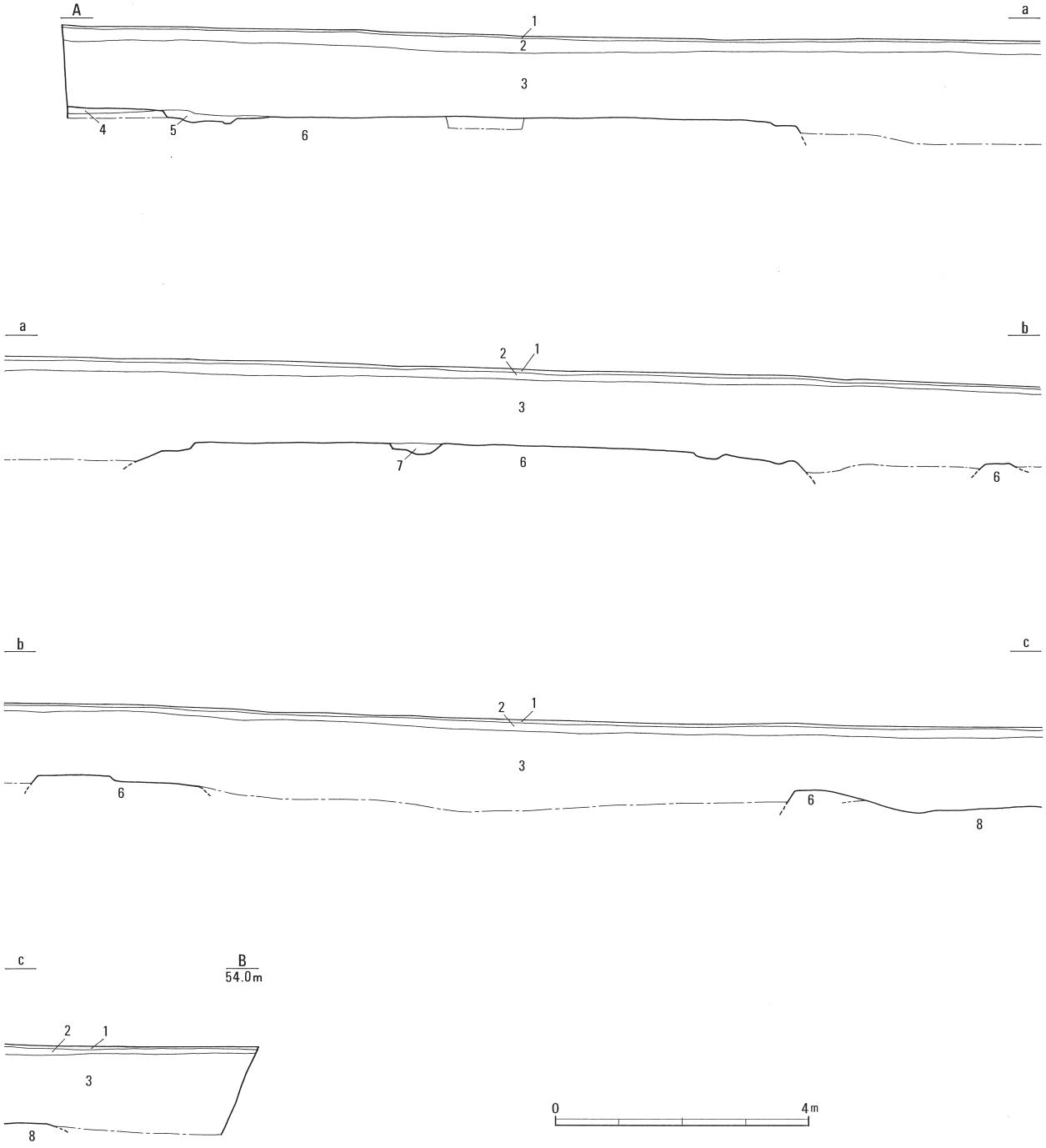


1　青灰アスファルト＜5PG 6／1＞
2　青灰砕石＜5B 5／1＞
3　橙色混礫土＜7．5YR 6／8＞（客土）
4　黄褐色土＜10YR 5／6＞（検出面）
5　浅黄土＜2．5Y 7／3＞（SD3・4、SK5 埋土）
6　暗灰土＜N 3／＞
7　灰土＜N 4／＞
8　灰黄褐砂礫＜10YR 5／2＞（流路）
9　褐色土＜7．5YR 4／4＞（流路）
10　黒色土＜N 2／＞（流路）
11　灰黄色礫＜2．5Y 7／2＞（流路）
12　浅黄砂質土＜2．5Y 7／4＞（流路）
13　暗緑灰土＜10G 4／1＞（SK2 埋土）
14　灰色土＜7．5Y 5／1＞
15　黒色礫土＜N 1．5／＞
16　緑灰粘土＜5G 5／1＞（SD1 埋土）
17　明赤褐粘土＜5YR 5／6＞（検出面）

第 10 図　椋本南方遺跡Ｂ区土層断面図③（1:100）

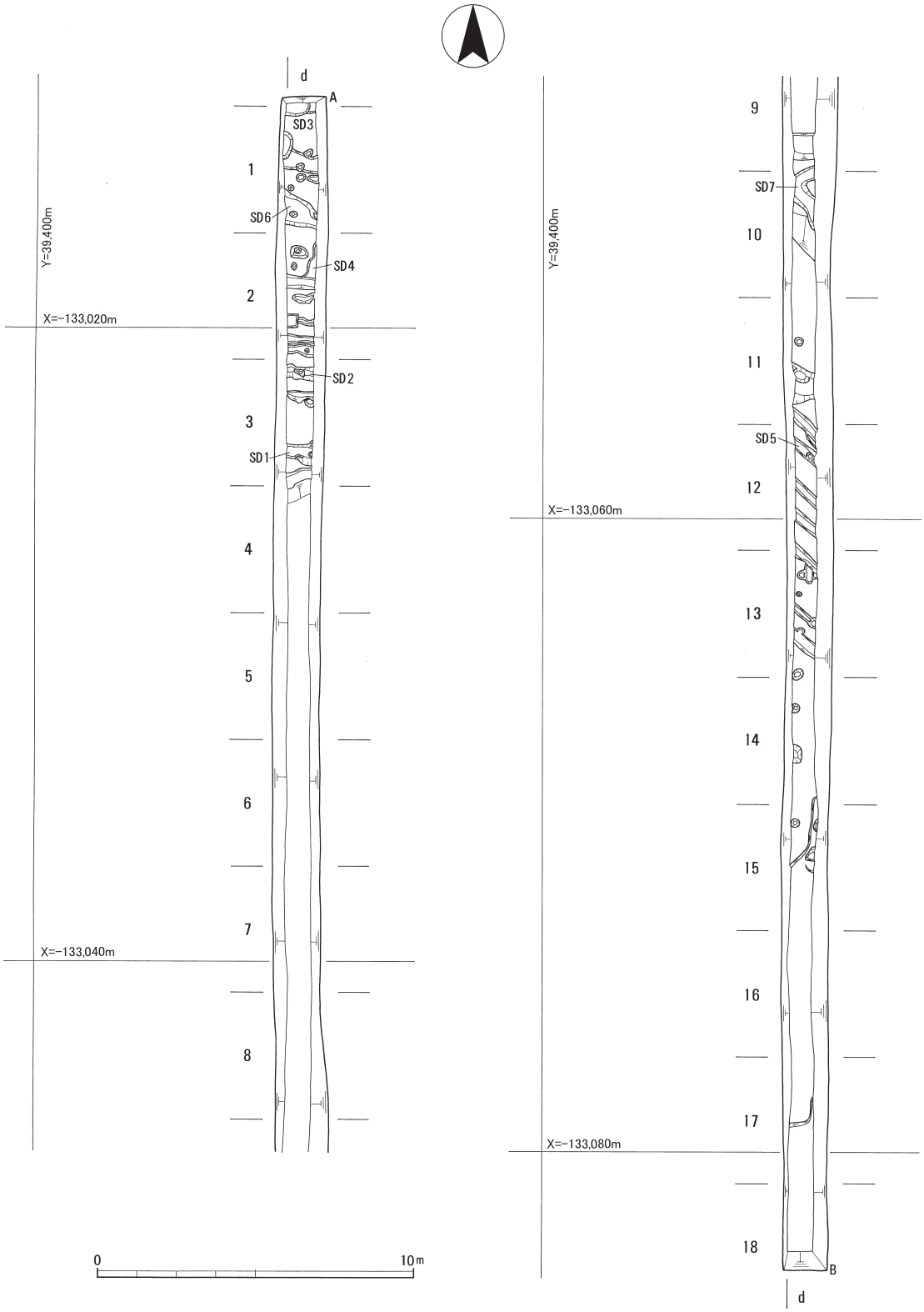


第 11 図　椋本南方遺跡Ｃ区遺構平面図（1:200）

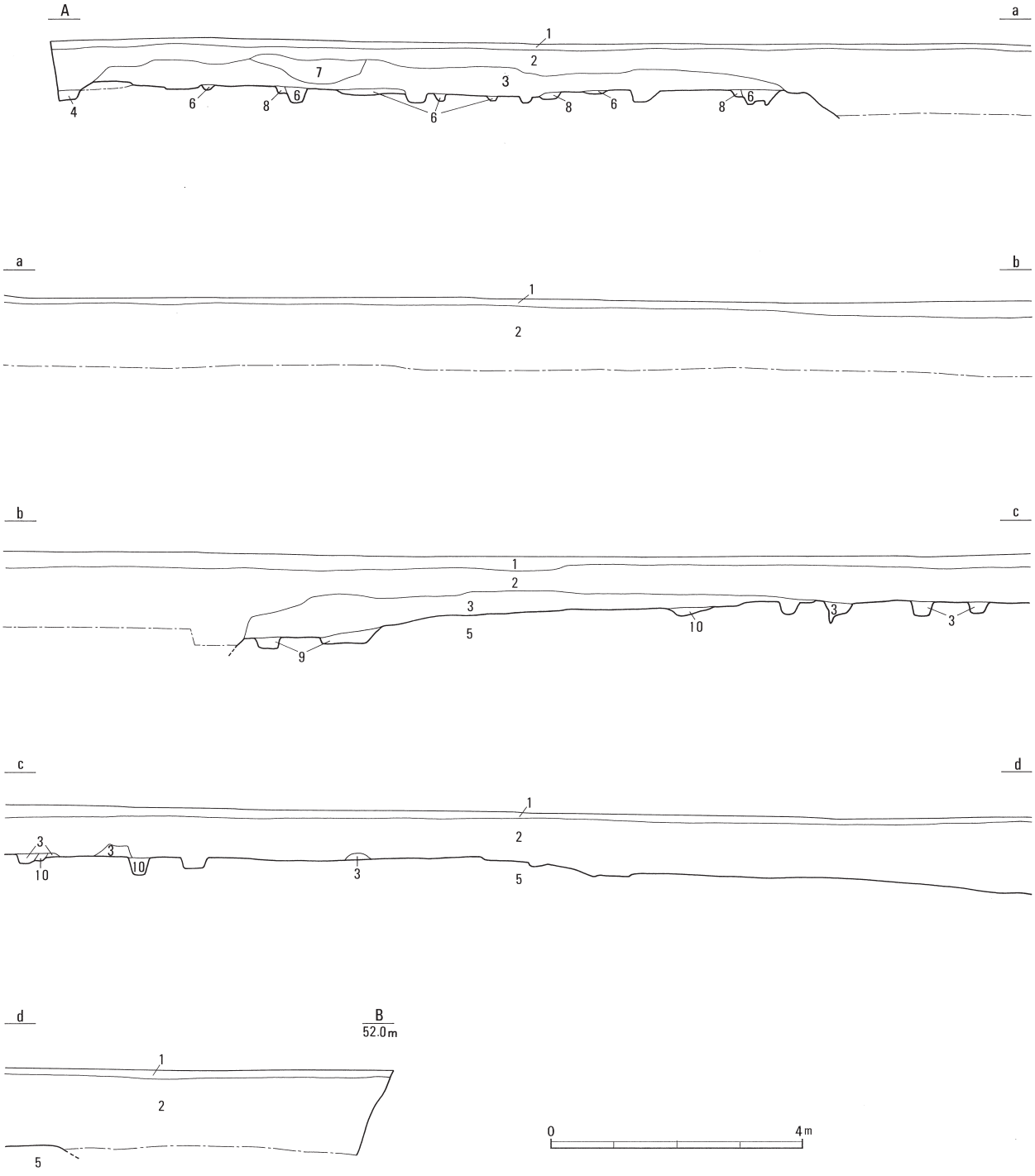


1　青黒アスファルト＜5BG 2／1＞
2　灰白砕石＜10YR 7／1＞
3　灰黄褐混礫土＜10YR 5／2＞（客土）
4　黒土＜10YR 2／1＞（検出面）
5　灰黄褐土＜10YR 6／2＞
6　黄橙粘質土＜10YR 7／8＞（検出面）
7　黒褐土＜10YR 2／2＞
8　明黄褐砂礫＜10YR 7／6＞（検出面）

第 12 図　椋本南方遺跡Ｃ区土層断面図（1:100）



第 13 図　松山遺跡Ｄ区遺構平面図（1:200）



1　にぶい黄褐＜１０YR ５／３＞（表土）（SD ５埋土）
2　橙＜７．５YR ６／８＞（客土）
3　灰オリーブ＜５Y ５／２＞（旧耕作土）
4　黒褐＜５YR ２／１＞（SD3 埋土）
5　明黄褐＜１０YR ６／８＞（検出面）
6　オリーブ褐＜２．５Y ４／４＞
7　黒＜１０YR ２／１＞
8　黄褐＜１０YR ５／８＞（SD1・2・6 埋土）
9　黄灰＜２．５Y ６／１＞（SD ７埋土）
10　オリーブ黒＜７．５Y ３／１＞

第 14 図　松山遺跡Ｄ区土層断面図（1:100）

4　松山遺跡Ｄ区

Ｄ区も農道に沿うパイプラインの埋設箇所に設置した。基本層序は現況地盤の上から、表土、盛土、旧耕作土、明黄褐土で、検出面の明黄褐土は、地表よりおよそ 70 ㎝の深度である。北部では、旧耕作土が残存しており、その直下が検出面となる。SD ３からは須恵器、山茶椀、中世以前の土師器の小片が出土している。黒褐色の埋土であり、中世以前の遺構と考えられるがその性格は判断できない。またロクロ土師器の小片が出土した小穴群は、間隔１ー２ｍで一線上に列をなしており、建物の柱跡かあるいは柵と考えられるものの、掘形が不揃いで疑問も多い。SD ５からは古墳時代以前の土師器の小片が出土している。しかし北西から南東に同じ方向に向かう溝が複数並走しており、その埋土は SD ５を含め、旧耕作土と同じであるため、耕作に伴う溝とみられる。SD １では山茶椀が、SD ４から縄文土器と山茶椀が、SD ６からは縄文後期の土器が出土している。埋土は耕作土ではないものの、どれもが東西に延びる同方向の溝で、SD ２から近代以降の瓦が出土していることから、近代以降の耕作に関連するものと考えられる。また包含層からは山茶椀、奈良・平安時代の須恵器、表土から灰釉陶器が出土している。

Ⅳ　遺　　物

今回の調査で出土した遺物は、縄文時代、奈良・平安時代ー室町時代のものがあるが、平安時代ー鎌倉時代前半の土師器、陶器（山茶椀）が多くを占める。また、大半は遺構検出時に出土し、明らかに遺構に伴うものは少ない。

1　椋本南方遺跡Ａ区出土遺物

１は土師器の椀としたが、全体的に摩耗が著しく、ロクロ土師器の可能性も残る。２ー 11 は土師器皿で、口径 15 ㎝弱の大型と９㎝弱の小型のものがある。大型のもののうち２は口縁部を２段に強くヨコナデする。県内では中勢地域を中心に分布するもので、12 世紀後半から 13 世紀初頭のもの[①]とされている。小型のものには内弯して立ち上る口縁部をもつもの（４ー８）と底部から屈曲して立ち上る口縁部をもつもの（９ー 11）があり、後者は器高の高いもの（９）と扁平なもの（10・11）に分かれる。９は口縁部内面に煤の付着があり、灯明皿として使用された可能性がある。これらの小型皿も２と同様な時期と考えられる。14 ー 16 は土師器鍋の口縁部片で、小片で全体の形態が明確なものはない。口縁部の形態はいずれも第１段階で 12 世紀後半から 13 世紀前半のもの[②]とする。なお、14 と 16 は同一個体の可能性がある。12 はロクロ土師器、13 は黒色土器Ａ類で両者とも椀である。いずれも小片であり平安時代後半とするに止める。17 は緑釉陶器椀であるが、剥離及び摩耗が進んでいる。硬質に焼けているが橙色を呈する。18 ー 21・26 は灰釉陶器で、18 ー 20 は椀、21 は壺である。18 の口縁部は外反し、灰釉は漬け掛け、19・20 の高台は三日月状である。これらは K－90 号窯式の後半と考えられ 10 世紀前半に相当する[③]。26 は高台の幅がやや広く、断面が三角形状を呈しており、百代寺窯式の後半と考えられ 11 世紀前半に相当する[④]。22 ー 29 は山茶椀である。22・23 の口縁部は外反しているが、24 は直線的である。高台についても 27 は高く整然としたものであるが、28･29 が低く潰れたものとなる。山皿と呼ばれる 25 の高台は消失している。これらから第５型式のものと第７型式前後のものが混在しているものと思われ、前者は 13 世紀前後、後者は 13 世紀中頃[⑤]となる。

2　椋本南方遺跡Ｂ区出土遺物

30 は土師器皿で、口径９㎝のＢ形態となり、15 世紀中頃のものである。31 は台付皿か椀で、内外に煤が付着している。平安時代後期と思われる。32・33 は山茶椀である。外反する口縁部や比較的高く整然とした高台から第４型式で 12 世紀後葉のもの[⑥]となる。34 は灰釉陶器で、高台が三日月状を呈し、K－90 号窯式の後半と考えられ 10 世紀前半に相当する[⑦]。

3　椋本南方遺跡Ｃ区出土遺物

35 は土師器の羽釜の小片、36 は陶器の皿と思われ、

36 の内面に墨痕状の痕跡があるが、明確ではない。

4　松山遺跡Ｄ区出土遺物

37 は縄文土器深鉢の口縁部である。波状口縁を呈し、山の部分が注口状の把手となる形態は東庄内Ａ遺跡出土の 79[8]と同類と考えられる。山の部分が当遺跡出土の 37 は低く、磨消縄文の構成に若干の相違があるものの、東庄内Ａ遺跡と同様、縄文時代後期初頭と考えられる。38 は土師器鍋の小片で、第１段階[9]、39 は山皿で第５型式[10]となり、いずれも 12 世紀末前後である。40、41 は山茶椀で、40 の高台には籾殻痕が多く、体部はやや丸みをもって立ち上がる。第４ー５型で 12 世紀後半のもの[11]である。41 の高台は雑に張り付けられ、一部は体部の側面に及んでいる。これは第６型式で 13 世紀前半のもの[12]である。

［註］

① 伊藤裕偉「中北勢地域の中世土器」『三重県史　資料編　考古２』2005 年

② 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol.1』三重歴史文化研究会　1990 年

③ 斉藤孝正「越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器」『日本の美術』2000 年

④ 藤澤良祐「総論」『愛知県史　別編　中世・近世瀬戸系　窯業２』2007 年

⑤ 前掲④に同じ

⑥ 伊藤裕偉「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史　資料編　考古２』2005 年

⑦ 前掲④に同じ

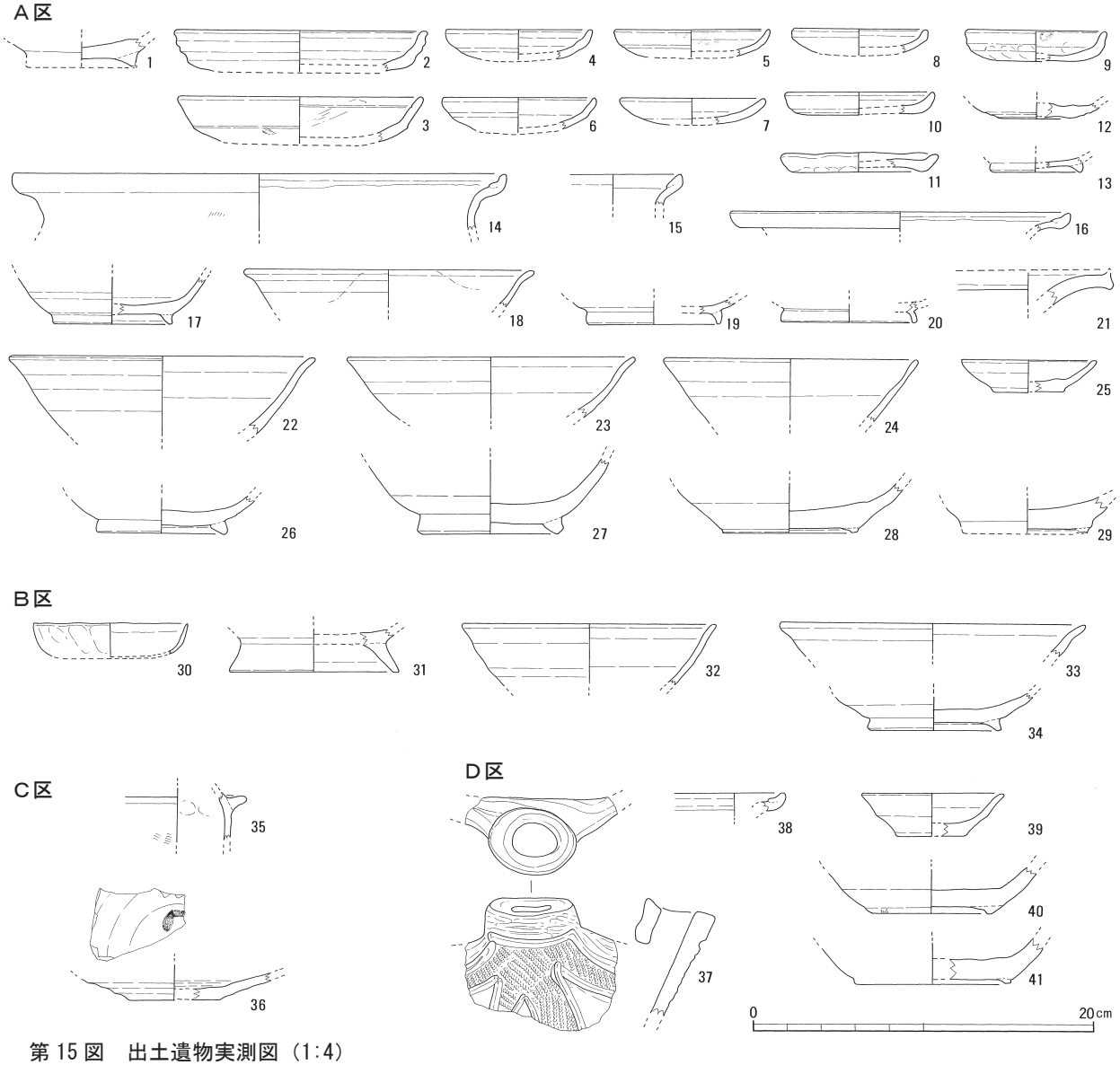
⑧ 日本道路公団名古屋支社・三重県教育委員会『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』1970 年

⑨ 前掲②に同じ

⑩ 前掲④に同じ

⑪ 前掲④に同じ

⑫ 前掲④に同じ



第 15 図　出土遺物実測図（1:4）

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量 (cm)			調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
					口径	器高	その他					
1	5-1	A-16 表土	—	土師器 椀	—	—	高台径 6.8	内面ナデ	浅黄橙(10YR8/3)	0.5㎜の石含	底部3/12残	
2	6-3	A-8 包含層	—	土師器 皿	14.9	—	—	外面ユビオサエ、ナデ、内面ナデ	にぶい橙(7.5YR7/3)	やや密、金雲母多く含。	口縁部1/12残	
3	6-1	A-6 包含層	—	土師器 皿	14.4	—	—	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	密	口縁部1/12残	籾殻痕、工具痕
4	5-2	A-2	SD1	土師器 皿	8.6	—	—	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	やや密	口縁部2/12残	
5	4-5	A-13 包含層	—	土師器 皿	9.2	—	—	外面オサエ、ナデ、内面ナデ	灰黄褐(10YR6/2)	密	口縁部2/12残	外面内面ともに油煙煤有り。
6	5-8	A-13 表土	—	土師器 皿	9.1	—	—	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/2)	密	口縁部2/12残	
7	4-3	A-6 pit1	—	土師器 皿	8.6	—	—	外面ナデ、内面ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	やや密	口縁部1/12残	口縁端部に刻目。摩滅のため調整不明確。
8	4-8	A-2	SD1	土師器 皿	8.0	—	—	ナデ	にぶい黄褐(7.5YR6/4)	密・金雲母多く含。	口縁部2/12残	
9	5-4	A-9 包含層	—	土師器 皿	8.3	—	—	オサエ、ナデ	灰白(10YR8/2)	密	口縁部3/12残	口縁部に内面煤付着
10	5-5	A-2	SD1	土師器 皿	8.8	—	—	外面オサエ、ナデ、内面ナデ	にぶい橙(5YR7/4)	2㎜の砂粒数個含。	口縁部2/12残	
11	5-9	A-19 包含層	—	土師器 皿	9.2	—	—	外面オサエ、ナデ、内面ナデ	にぶい橙(5YR7/4)	密	口縁部1/12残	
12	5-6	A-6 包含層	—	ロクロ土師器 椀	—	—	底径 4.4	ロクロナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	密、金雲母含	底部4/12残	底部外面に糸切痕。
13	5-3	A-24 包含層	—	黒色土器 椀	—	—	高台径 5.4	ナデ、内面燻し	外：にぶい橙(5YR7/4) 内：黒褐(2.5Y3/1)	金雲母含	底部1/12残	
14	6-4	A-2 包含層	—	土師器 鍋	29.2	—	—	外面ハケメ	外：橙(2.5YR6/6) 内：にぶい黄橙(10YR6/4)	密	口縁部1/12残	
15	4-2	A-12 包含層	—	土師器 鍋	—	—	—	ナデ	外：褐灰(10YR4/1) 内：灰白(10YR8/2)	やや粗	口縁部小片	外面煤付着。
16	4-4	A-2	SD1	土師器 鍋	20.0	—	—	外面オサエ、ナデ	にぶい黄橙(10YR6/3)	密	口縁部1/12残	
17	4-1	A-14 包含層	—	緑釉陶器 椀	—	—	高台径 7.0	ロクロナデ	外：にぶい橙(10YR7/3) 内：にぶい橙(7.5YR7/3) 釉：灰オリーブ（7.5Y5/3)	密	底部4/12残	底部外面に糸切痕。
18	7-5	A-15 包含層	—	灰釉陶器 椀	17.0	—	—	ロクロナデ	灰白(2.5Y7/1)	密	口縁部1/12残	渥美産。
19	7-6	A-16 表土	—	灰釉陶器 椀	—	—	高台径 8.0	ロクロナデ	灰白(2.5Y7/1)	密	底部2/12残	猿投産。
20	7-7	A-17 包含層	—	灰釉陶器 椀	—	—	高台径 8.0	ロクロナデ	灰白(5Y7/1)	密	底部2/12残	猿投産。
21	7-2	A-14 包含層	—	灰釉陶器 壺	17.0	—	—	ロクロナデ	素地：灰白(5Y7/1) 釉：灰オリーブ（5Y6/2)	密	口縁部小片	猿投・知多産。
22	7-4	A-15 表土	—	山茶椀 椀	18.0	—	—	ロクロナデ	灰白(2.5Y7/1)	密	口縁部1/12残	渥美産。
23	7-1	A-1 表土	—	山茶椀 椀	17.0	—	—	ロクロナデ	灰白(5Y7/1)	密	口縁部1/12残	猿投・知多産。
24	1-1	A-6 pit1	—	山茶椀 椀	14.7	—	—	ロクロナデ	灰白(2.5Y7/1)	1㎜の砂粒j若干含	口縁部2/12残	猿投・知多産。
25	7-3	A-15 表土	—	山茶椀 皿	8.0	1.9	—	ロクロナデ	素地：灰白(5Y7/1) 釉：灰オリーブ（5Y6/2)	密	口縁部2/12残	底部外面に糸切痕。猿投・知多産。
26	1-3	A-20 包含層	—	灰釉陶器 椀	—	—	高台径 7.2	ロクロナデ	灰白(10YR8/1)	3㎜の砂粒若干含	底部3/12残	底部外面に糸切痕。内面に自然釉が若干掛かる。直接重ね焼き痕。渥美産。
27	1-2	A-12 表土	—	山茶椀 椀	—	—	高台径 7.8	ロクロナデ	灰白(10YR7/1)	1㎜の砂粒j若干含	底部10/12残	底部外面に糸切痕。内面に自然釉が若干掛かる。高台部に籾殻痕。知多・猿投産。
28	2-2	A-9 包含層	—	山茶椀 椀	—	—	高台径 7.4	ロクロナデ	灰黄(2.5Y7/2)	2㎜の砂粒若干含	底部4/12残	内面に自然釉が若干掛かる。直接重ね焼き痕。高台部に籾殻痕。渥美産。
29	3-1	A-22 包含層	—	山茶椀 椀	—	—	高台径 7.0	ロクロナデ	灰白(2.5Y7/1)	2㎜の砂粒若干含	底部4/12残	底部外面に糸切痕。知多・猿投産。
30	6-2	B-46	SD4	土師器 皿	11.3	—	—	外面ユビオサエ、ナデ、内面ナデ	灰白(2.5Y8/2)	密	口縁部1/12残	
31	5-7	B-47	SD3	土師器 台付皿	—	—	高台径 10.0	内面ナデ	にぶい橙(7.5YR7/3)	密	底部1/12残	外面内面ともに油煙煤有り。
32	7-8	B-8 表土	—	山茶椀 椀	15.0	—	—	ロクロナデ	灰白(5Y7/1)	密	口縁部1/12残	猿投・知多産。
33	8-1	B-2 包含層	—	山茶椀 椀	18.0	—	—	ロクロナデ	灰白(5Y7/1)	密	口縁部1/12残	渥美産。
34	2-1	B-16 表土	—	灰釉陶器 椀	—	—	高台径 7.4	ロクロナデ	灰白(10YR7/1)	密	底部4/12残	底部外面に糸切痕。底部内面使用痕。猿投産。
35	4-7	C-2 表土	—	土師器 羽釜	—	—	—	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/2)	密	鍔小片	
36	4-6	C-8 包含層	—	陶器 皿	—	—	底径 5.4	ロクロナデ	外：灰黄褐(10YR5/2) 内：灰(5Y6/1)	1㎜の砂粒含	底部3/12残	内面に墨書有り。
37	8-3	D-1	SD6	縄文土器 深鉢	—	—	—	外面磨き、内面ナデ	褐灰(10YR4/1)	2㎜の砂粒含	口縁部片	沈線の内側は縄文後擂り消し
38	8-2	D-16 表土	—	土師器 鍋	—	—	—	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	やや密	小片	
39	3-2	D-1	SD3	山茶椀 皿	8.0	2.5	—	ロクロナデ	灰黄(2.5Y7/2)	1㎜の砂粒j若干含	口縁部3/12残	底部外面に糸切痕。知多・猿投産。
40	2-3	D-1	SD3	山茶椀 椀	—	—	高台径 6.7	ロクロナデ	灰黄(2.5Y7/2)	5㎜の砂粒含	底部4/12残	高台部に籾殻痕。知多・猿投産。
41	3-3	D-9 包含層	—	山茶椀 椀	—	—	高台径 9.0	ロクロナデ	浅黄(2.5Y7/3)	2㎜の砂粒含	底部3/12残	高台部の取り付け雑。渥美産。

第1表　遺物観察表

V　結　　語

椋本南方遺跡において、昭和62年度の１次調査では平安時代前期と鎌倉時代前期の掘立柱建物が検出され、奈良時代や平安時代前期の竪穴住居も多数検出されている①。一方、平成４年度の２次調査では、平安時代末と鎌倉時代前半の掘立柱建物が検出されている②。２次調査の範囲は、１次調査の範囲よりやや北側である。このため当遺跡では奈良時代に安濃川に近い段丘上に集落が形成されはじめ、鎌倉時代前期に安濃川からやや離れた段丘上まで集落が広がったものと考えられている③。今回の調査区は、1次調査区よりやや南側にあたり、椋本南方遺跡の南端にあたる。また検出された遺物は奈良時代ー鎌倉時代前半のものが主で、１次調査と２次調査の結果と同様であるものの、集落跡等の検出には至らなかった。それは、どの調査区も検出面の幅が約80㎝程度のトレンチ状であることに加え、検出面も後世の撹乱によって削平され、本来の検出面ではない部分がほとんどであったためということが想定される。また今回の調査においても、室町時代の遺構は検出されず、出土遺物も若干である。これは安濃川の氾濫等により、人々は徐々に段丘低位置から高位置へと移動するという従来の考え方を肯定する結果である。そして現在の椋本宿の位置で落ち着くこととなり、今に至るようになったのではないだろうか。

一方、松山遺跡においても生活場所の移動はあったようである。昭和62年の１次調査で９ー10世紀と12世紀前半の遺構や12世紀後半の遺構が確認されている④。そこから分かることとして、時代を経るとやや東へ移っており、これも安濃川から少し離れる方向での移動である。注目されるものとして、松山遺跡では等間隔で平行している２本の溝⑤がある。この溝を側溝とする直線道路が平安時代前期に成立したと見られる古道と考えられている。当地では、以前から古道が通っていたと想定されていた⑥が、約330ｍの直線道路は三重県内で確認されている道路遺構としては最大級の規模である。また、道路遺構の延長上にあり、椋本南方遺跡と松山遺跡の間に所在する馬屋町遺跡の小字が「馬屋町」である。さらに、松山遺跡には「大門」、松山遺跡の北段丘上に「追上」という小字が残されているが、これらも駅路に由来すると考えられる。

今回の調査区はこの道路遺構から南へ外れるため、古道や駅家に関連することを示す遺構は検出できなかったが、椋本南方遺跡からは、緑釉陶器や灰釉陶器が出土するなど、この地は都と伊勢神宮を結ぶ一つの要地であったということは十分考えられるのである。

そのほか、縄文時代に関して、松山遺跡Ｄ区から後期の小片が出土している。また、椋本南方遺跡では、２次調査で、中期の小片が４点出土している。同じ安濃川左岸上流で、椋本南方遺跡の北西に位置する大石遺跡では中期の縄文土器を中心として、終末期までの土器が出土している⑦。松山遺跡では、これまでに出土の例がなく、中期の大石遺跡と椋本南方遺跡の関連を考えても、後期の土器が出土したことは、安濃川左岸での後期の活動範囲等を考える上で注目される。

［註］

① 三重県教育委員会『安芸郡芸濃町　椋本南方遺跡』1988年（現地説明会資料）

② 三重県埋蔵文化財センター『東浦遺跡・椋本南方遺跡ほか』1993年

③ 前掲②に同じ

④ 三重県教育委員会『芸濃町萩野　松山遺跡−Ｃ区−』1987年（現地説明会資料）

⑤ 三重県『三重県史　資料編　考古２』2005年

⑥ 上田正昭『探訪　古代の道　第二巻』法藏館1998年

⑦ 三重県埋蔵文化財センター『平成３年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告−第１分冊−』1992年

椋本南方遺跡Ａ区調査前風景（南から）

椋本南方遺跡Ａ区全景（北から）

写真図版 2

椋本南方遺跡Ｂ区調査前風景（東から）

椋本南方遺跡Ｂ区全景（東から）

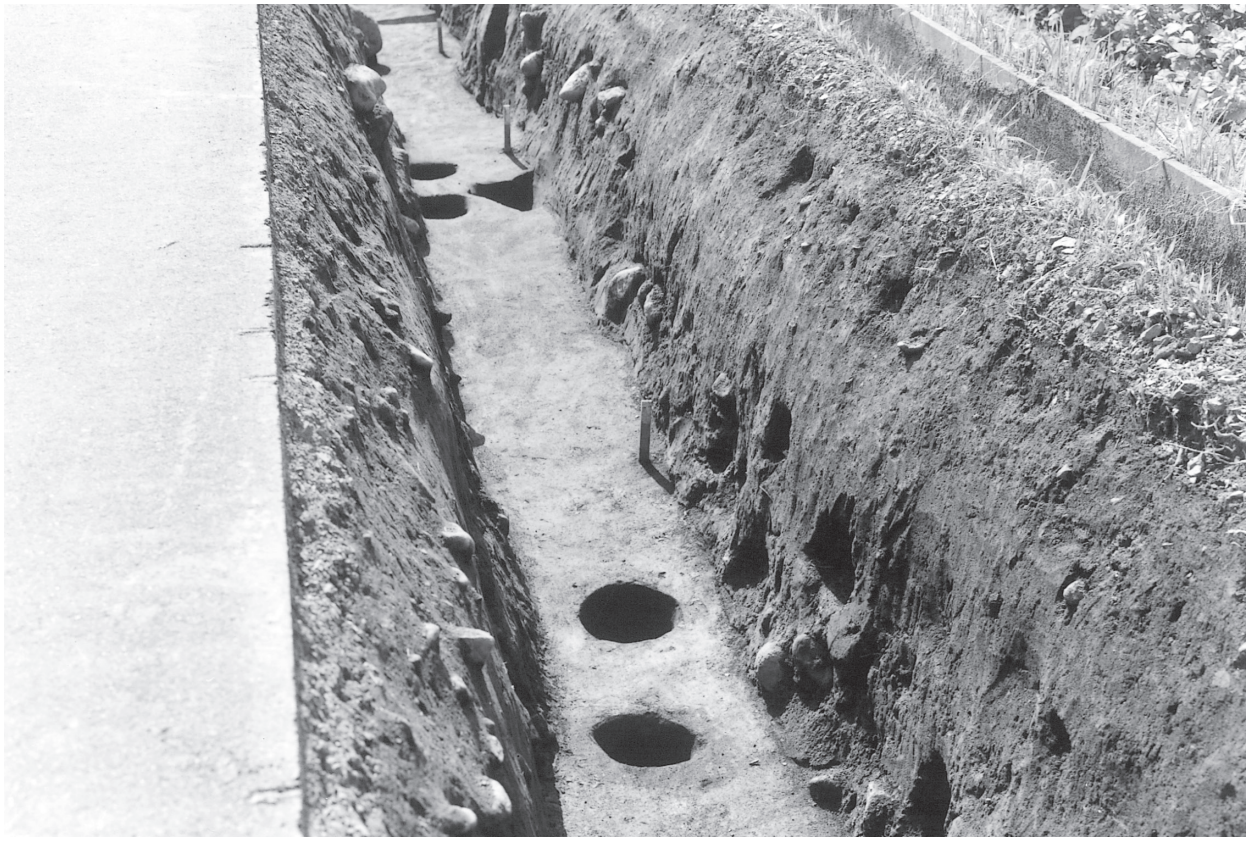
椋本南方遺跡Ｃ区調査前風景（北から）

椋本南方遺跡Ｃ区全景（北から）

写真図版４

松山遺跡Ｄ区調査前風景（北から）

松山遺跡Ｄ区全景（北から）

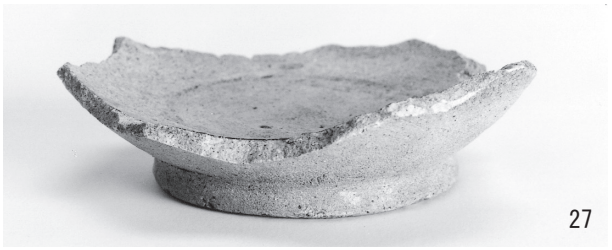


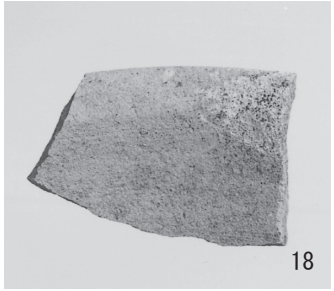
椋本南方遺跡Ａ区小穴群（北から）

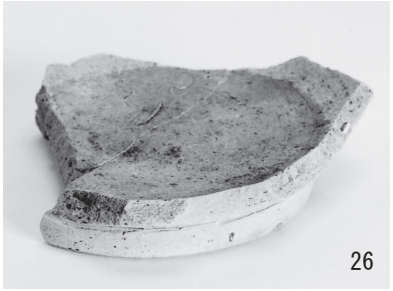
椋本南方遺跡Ｂ区小穴群（西から）

写真図版 6

松山遺跡Ｄ区小穴群（南から）







出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	むくもとなんぼういせき（３じ）・まつやまいせき（２じ）はっくつちょうさほうこく
書名	椋本南方遺跡（3次）・松山遺跡（2次）発掘調査報告
副書名	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	332
編著者名	谷口文隆
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596-52-1732
発行年月日	西暦２０１２年１２月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	発掘原因
むくもとなんぼういせき 椋本南方遺跡	みえけんつしげいのうちょう 三重県津市芸濃町	２０１	ｄ５５	34° 47′ 48″	136° 25′ 48″	20110914～ 20120112	769	高度水利機能確保基盤整備事業
まつやまいせき 松山遺跡			ｄ８７	34° 47′ 47″	136° 26′ 1″		98	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
椋本南方遺跡	散布地	奈良・平安 中世	溝　小穴	土師器（皿、鍋）、緑釉陶器 灰釉陶器、黒色土器、山茶椀	
松山遺跡			溝　小穴	縄文土器、須恵器、山茶椀 土師器	
要　約	両遺跡とも安濃川中流左岸の段丘上に位置する。縄文時代、奈良・平安時代、中世、近世の遺物が散布するが、明確な遺構は検出されなかった。しかし、緑釉陶器が出土していることから、古道および駅家との関連が考えられる。				

三重県埋蔵文化財調査報告332

椋本南方遺跡（3次）・松山遺跡（2次）発掘調査報告
2012（平成24）年12月

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　㈲ミフジ印刷